二十五ヶ條辯書

911.3
二

俳諧二十五箇條辨晉

俳諧二十五箇條辯香

俳諧二十五箇條辯香

皇都 芭蕉堂
桒 闌更著述

第一 俳諧之道とする事

或人問曰俳諧は何の為にする事ぞや俗談平話をたゞさんがため也又問俳諧乃元祖は何ぞ又答佛道に達磨有り儒にあり莊子有て道に実ある事を看破せり然るに俳諧にもかくのごとしと云時は道の友となる時は此の道理とされども俳かいの姿を詩まで乃次に立て人は向上の一路に遊ぶべし

口傳一向宗之事有
春秋心法 蔓藤之秘訣

此二十五ヶ條の本意文章ハ俳といへる者を左に記して去来翁を傳へたる翁の法を問ふ翁是非の題目 天水抄 二十五ヶ

俳諧二十五箇條辯晉

皇都芭蕉堂
菜闌叟著述

第一 俳諧之道とする事

或人問曰俳諧ハ何の為にする事ぞや俗談平話をたゞさんがため也又問俳諧ハなにとて虚而実何又答佛道ハ達磨より儒道ハ荘子ありて道に実の二を看破せり歌道ハ俳諧をかくのごとしと然時ハ道の友とする時ハの道理をされども俳諧の道を守事ハ次に立て人ハ向上の一路に遊遍し

口傳一向宗之古事有
春秋心法　蒦麟之秘訣

此二十五ヶ條の本意支考ハ俳と云る書をあらはし志て古来翁の掟をまもらんがため法を問なく翁ハ其身の見目

天水抄　二十五ヶ

余が傳て廿五ヶ條の趣をも去来是をも得て深く秘す
其後支考庵舎〔去来草堂 在于嵯峨〕の旅宿に入て寫
し取て出す故に支考が文加ゆる二振りし論し秘し
○先俗談平話を正すとは義を深く又云平話とありは
句調健しきすゞ流し平話とは南無阿弥陀仏と云て
仏を尊ぶといふぬく人を近て道は大安き事く古今の
序は花に鳴鶯水に住む蛙の聲を五七五七と近てはとあれを
世の人の小さき小在ふ辞も五七五七に遍へぬなかるめまでと
行を交りて人の家ふることとし句調又かくのごとし
又平話を正すとは人に不通する詞や不正を正すと云へば落根
背を本振ひとくといひ木筆に文飛と書と云ば鑁(ボツ)なり

哥にも闘曲(フリ)ありて又五音の四声とのえし二字を伸して歌ふ
句多くある座頭(ガトウ)坐頭(ザトウ)坊と云ふるをお句にあてゝ写習(ガツ)ふ
馬の背とふるて句風俗を遍てふるべし
笠鉾やいりこまりきのぬうり笠
いつことなく雅なるなく二字ありて中ねのれ大むと感さん
俳言を達て傳ふる荘子をもふのねし此とくあ時の為よ
足きくる古の俳諧まねくやするれ人はもとに隔るとふを
とも達て荘子に對す文もして門さるく　達磨ハ二十八代目に
まで諸佛の孫ちみやかと称り一字に説すさてふ立文字の法
とてる荘子がくみめし空云て誹を報りて此方と云てみての
俳々ぬく侍る　口傳に一向宗の事とふ云ふまきを云ふ世

蕉翁之秘書ハ執る事なかりて其法を授る之古文士ハ寛を定
る ― 其外心法ハ孫毛の以心伝心之家に納るものを
春秋のとをんを以ん手伝ふとこそ之俳諧かくのめし

第二 俳諧の二字之事

古人の二字ハ古来之寛敷ハ二字書をして誹ハ俳の音なり
されども史記の滑稽之列にも俳の字を定めるとなん其の後に
暗きを能古今集より誹の字を用ゆ事はるかに遠く妙影ハ
古実とも謂ふとも違ひて用る事もなり然れば唯今拙なるとも
俳諧と誹諧の二様にわかれて此家にても見たてなんわれに古今は
と着はし是眼より云ふも妙なる名ハ別に定むる所もれと云
誹に縛りとハ本隠とこそ我家に入しより俳諧の二字も

然るへし 光門に対して古今を存て其故にしへ
十訓抄ハ志而て俳の字を用ゆしとに古き家の巻に
誹諧と書したるに古今集之二名を掲けて是より足を
かるるを退けて文集ハ史記より始りて俳諧より今の俳
諧ハ其ときはじめて起こりとしてと記す

古風の誹諧ハいてもよ拙なりさて九名を数ふ一ハ誹諧ハ併称
えらんまるる之二ハ俳諧ハ倭字にて狂之三ハ序諧ハ詞字かく
詞の家之四ハ誹諧ハ人の詞を以て其ままを物事をかりて待るる之五ハ
滑稽ハまりかしこと諷り六ハ謎字ハまりかりかしなど
のやうに化けるる也七ハ空戯ハひとすけにあれて其なる之八ハ節
謡ハやしき事を云ふる之九ハ狂言ハ俳のまかりきあるハ一体之

…ハ…の作…

まし是之二ツの事ハ知る所にして面白たとするものハ唯俳諧の変
化之其始ハ我国俳諧さかんにして松永貞徳俳諧の用
何ぞる歌しなり浦てより只松ハ老いしの木を植へとも
哥体かたしてんハ返らぬ万葉の心さしなりし知べき之代にハ乃
読よハ三代集の外此詞ハ用るさたなれとも其言の法にかなひ
あまり元禄の後くまゝ文大ひに変りて根生ず
言ハ

喜　哉　遇　可　美　少　女

あなうれしうれしたとへにいはぬ

喜　哉　遇　可　美　少　男

あなうれしうれしたとこにはぬ

此詞なとハ今の俳諧にも用ゆる事なれとも我も人も
よき詞之万葉集の詞として生てし我ハ我俳諧に万葉の
昔よりある故に姿ハ俳諧まれの深さを立るかしハ向上の一詠
になおしたるハ俳諧をかしき人ハ其事を成るへきの
師まかせ之是なりに小枝後の師匠の約束にて蕉門の
一家となりし之　古人なしてハ事に手をつけたる人ハ其事と
あはれす二ツの事ハ知れ句もなき
おもひかの次第消ゆるなきの旨

貞徳

火をもちいしは都之今の俳諧と唐音の功を作る之一とせ
故翁は国行御の時にはなれたるおのゝを問翁答云ありたれ
ぬいはさとき史記の俳諧をいひて有又迎き貞治貞室が誹諧
まで見之二三年よりはあるとも有たる所もいはぬ唯有の変
を之其始は我国有をもて示さんとして素庭の体有の用の
何まるあらしめぬり浦でより貝拾ふは志山しの木を樵人とも
あら旅かなしてしは通はぬ万葉の人さしくあそびの気之にて人の
読よいは三代集の外北詞と中るきたるとある其変の流にはさかん
あまて代千代の様く生まるゝと又大ひと衰ひ衰て根本を千年
有は

喜哉遇可美少女

あなうれしゑやうましをとめにあひぬ

喜哉遇可美少男

あなうれしゑやうましをとこにあひぬ

此詞なとは今の有に通ひ候を此まるまほにして我をいふ心
ときは詞之万葉集の詞をしてとしきてし我は我俳諧と万葉の
書まうつるゝ故に姿は有まに風の流を立むかしいは向上の一路
にあらずしたいは我かとは借らしてのえんはそむき底る之事
祥まりし之是からわには小枝総て師弟の綱を存りて蕉門の
一派となりしと　古人なしてゝは常にを事にかゝる人はたすきと
まりれ其二三年よいはれりけり句もある
きうりけの次盃消せとりきかの言

貞徳

りさの多斤之月に夕ヲ京　忠知

これはゞとばかり花のよし野山　貞室

是等は常におもしきを悲しとし衒(ゲン)して妙(メウ)にしては義
史記は若き唐士の事なれども和にて旧代の俳優を和漢
同きの事にて此りたるわざ之　又古の俳諧は情をかりめし
姿は情をさとせといひてこの俳諧は詞をたてて情を情るまでや
いは宝字彙を以たる人を立て詞を情くすれば姿は立てり
情は情之言をたてし詞を情てまれ情は立之姿は情なり
されどもかのたかいにおるには全く俳の字をよがりんかし

第三　虚實之事

第一　物は虚に居て實に働く實に居て虚に働くべからずと立て

人のまことある所をねらへは昔みちある月を詠めて月の脈を惜む
も實を本としてこれ實は主身の實之處をたゞしさは俳諧の實之杯詩也
去俳といふ物は上手の虚をはく事と虚實を又まとめひ
實は虚をと世智辯といひ實の實を仁義礼智と云虚の虚
きとのは世を稱して其は又多かるべし此人をさして我家の
侍とはいふ也べし

十論に虚にみて實を行ふといふ辞に世帯の事をとりてをと
世帯は人にしてある不實之其世帯を人のおくるさみとの
きんといふ時はあるまで是を虚とりもち實をくふといふを振り
とあり俳諧の此跡のねらへを閉けり　下界　此は一振に論し
かれは實にみて虚を論ずれば人ぐかなくかしこくは大なる雄を

以前に云し一実に居て虚を行ふはとかくのごとし
是故に情を先にして姿をば其後に言へし情を後にす
るは是虚実の前後なり俳諧は情をよる故は
　蕣はしきのふや語を望まれし
此発句なと姿を先にして情を後にす梅が香し実情の実を
述て林和靖なとの詠もなく詩をそのまゝ見せやと情むんも
虚之此句は花鳥吟詠の三耳が事を語りて時の咄之
二実に居て虚を翫ぶ句は
　梅咲やさらで落つる庵　桂　去帝
此句なとは姿を先にして情は梅之志らしといふ夜の志らしぬく
身のさらしあるなとゝ同しくきといふ之落窪の物語のなかの
名にして桂去帝も同しく桂舟の手紙題号之
又俳諧に言ひ惜む句もあり
　しばらくは花の上なる月夜哉
　名月や池をめぐりて夜もすがら
是等の句は実に居て虚を翫ぶ事なし虚に居て実を行ふといへは荘
周が仁義を反の害としていふ実に居て虚を翫ふといへは孔子
の牛刀の論なとを云ふへし虚に居て実を行ふといふとも
二実は遊ぶなりされは之故は虚は天之天は長くおくあるなし
此は眺めて又定るにあらすして実は自然之紙は此方ならさるなれは
鵜飼のことしといふは是人之はたらぬ所之事にて此方まて
人生まれて此人の名も定まれは定まりて実の理なり

古今誹諧嫌ふ

唐土の芳野の奥とかや霞の今おもふ我あれなかに
此人々と古風の誹諧よくし候これらの人をやさしく情むと云ふ

梅か香にのつと日の出る山路かな

涼しさと絆ちを鍋まへ〳〵て夏森かな

前書を見るに神路の景色を折りを云述へるやうなれハ
其もとしよく折る山路かさしかる日の句に梅か香に誘ひ余寒
ありて陽春を待ぬ手便之　協吉ハ秋の旅中のある時に
此句れ此句の心ハおもふそもとる也是ても實となりて句を詠ふ
句とはいへさ歟　虚をみて實にあるものハ稀にして多し
こまてハの事ハ實なるきる句を世のこれまて上古き作ありて也

ろんハ唐土より虚り働く様なるへし

一 第四　変化之事

文章といふハ変化の事く変化とハ虚実のりを云之是白黒
ハ云語のあやにして是きを是しといふ是きを是しといふ是白一合
之然ハて此の変化に極まりて人ハ変化さまれて追廉する事情く流や
きいらハころ求る在て不此俳諧を遊り　春夏秋冬の変化に随ふ
月花の風情ころするを見てあれを変化を見りて変化するを能さ
ハ眼おのつきる句に迷ひておの後の変化を見きる様く是れ変化
といふ又新古あるもとし　其月其時の新古を見て一毛の変化有
極必へし変化之大旨料理の事く旋く章きるとし能も能
かしき詞きしあしらきて時によ随ひ其ち変化と知へし

文章といふハ変化のしるしと云孔子語ニモ管仲器小哉といひきハ
微管仲吾其被髪左衽ならんとし変化ハ文章のあやしきとぞ
千とせに及ふ小町を祇ふこ云ろまて見らぬ京極を移さし
月のかつら桂乃山と宗曲をとゝとあゆるこれ理屈の探を遂き
る風雅の文法といふ也　実ニ虚より生とハ虚に実ハ発る
まて悪て見たぬ大て実ハ悪と見かもるも虚ても好て虚にみて実を設
じ文字ニよみて實を設ふ人ハ生境をさとて虚字ニより生の
人と云へし　黒白一合といて此ハ人の名毎で下やしみる其向
し統ゝくるの分るゝ是ハ変化之是則変化の源之祖云ハ西方浄
土ハ死して後成仏する事を仏となるとしふさとと変化の一つ之文字を
を万角とるれを東ハ青南ハ赤北ハ黒中央黄にして西ハ白也

人の心も白くさ人何まし此染る之何もなりのかわ
きんを仏ともいひといふハ変化り生の人と云へし　変化をゐく
変化ニふり生るゝ迷ひて之始終翁の変化をゑぬ
人なるへし　其日其時の変化とハ牛人老人初心を見ゆ古
翁の老しく捨をそろまでる設き分し　料理の為さゝへ
三教一準しかゝる所をハ生て変化ニより生を捨へし　俳句
まとり生とハ祖云ハ居より実を傳る句
艶しく上京かりける京城しして
浮世のちてハ小町ありし里
実より虚ニ移ハ傳る句
姉ゝしと帝のとより其炬ハなり

拙つきとやんぬ又あらし翁

第五 起定轉合之事

俳諧ハ上下ヲ合せて歌一首とも作るべし起とハ虚二て界に向て
無き念相のうちに念相を発るといふ也一句発る時に対して
又生る句を拆といふ初の一句を定むる定の字或ハ兼て手上の
一句を支持の心これハ発句ハ陽く拆ハ陰とす一二ハ一滑して
了化なり人を生まるかとし人ハて化なり御けれ共終ぐ化なり也
る事を知べし合とハ第一句一合之節にハ流の字体心あるべし句なり
山も川も有て一巻の生就といふ也

起定轉合　起兼轉合　是ハ俳諧ニハ表ハ句に句を起して
失なり裏にて至るまで皆く句に尚く其時の配され為に百韻
といひ又五十員ハ半韻と云て好ませ就并して俳諧ハ変化し
て起ハ発句の句なる事定むる事を界立べし
虚二て界とハ未発の事之未発の時をさしておとしいふ此無念
相のうちに念お起る　古今に灌頂し
是近のた川きもきらぬ山中におはつらぬく味子なるの也
扨是はよく案入し仏ハ無念お之念おの起るとハ案する事にぬと
請の者或ハ句ある月の光る事ハ心之手亦之手もるハ詩の者と
知るハ言之其意にて八句七句かと狂を知るハ誠之心を誠共にて人心
まだ千用を知べし　是ハ景感の二つを景ハ眼見共
にみる事感ハ各人の深情にかたりめるにて俳諧の深情にあるり
末句の姿とハ松ハ松竹ハ竹とる人の百人ながら見る事ハ同じけれ

ても情ハ古人に独歩して上手大名人も手信して候へし
て知べき也此起承転合と并の五義を配まで遍序ハ起也
題ハ承也曲ハ転也流ハ合也

遍 序 題
あれなるし いとなくさまき 青柳の
曲 流

承ものかくれて よそに久しきまで

并と本句の趣ハ終ま迄翁の句まで五義に付てる句を引られ

遍 序 題
いさ 待しハ 青久り
曲 流

二語ふ こゝろまゝ

第六 發句に切字ある事

發句の切字とふかき落おの人之秘ハ是しやにより是しやを
はねぬ之祖云ハ亭主と客との差別を發ハ切字ある本句とも
切ぬと発ハ切字に候まて

桐の木の 霧にもれ墻 の内

此句五文字も人を隔る之切字のうへハ弁まで詮義行り先ハ
發句は骨柄とかくれべし

切字となりたると字書ニ反切ノ二字ヲ注シテ云音韻(オンイン)展轉(テンテン)相
協フコトロヲ反ト云 反音平声与翻同 両端相摩シテ聲韻トナル是ヲ切ト云云
是を他ふれて云も五七五の音韻展轉して句と成感動の

心緒を総ある句面に云探りしむ或は代り問
代に答て浮きを流ることに向て裏打代のかとを歌月枯野笛に灰
しかるを心を耆しむるの類皆是は句の一さりて趣向の情なり
季を用るを是は其の情を起さしの體なから其姿を定るか故に季
と情との兩端打摩して一句なるへし　切字の事前に云へん
ぎはれと字面に見ぬ所を見し本句と移りて上の句下の句の差
おきたる干は以て云へ　本句は十七字の内に切る所を拵へ上の句
下の句を兩端を拵ると知へし　然時は十八の切字は流して一字七文
字とも切字なるとは句作を写て自知へき　凡切字の所と云
ハ或は二字の御あるや此字

人も見ぬ春や鏡のうらの梅

ハ不のやには此やとハのやなといふ支考はやに三ホを定めて
称美歎息呼答とわかりを立る也然ハ此やハ治定にあり打軽るも
何にても心を擬く働かしむるやなれは歎息のやか

桐の木にうづら鳴なる塀のうち

本文にいふる所も切字の事此句には切字なくし切字を用ひ
ずして上五文字に切字ないといふ人もあれは鶉は桐の木あたりに留りて鳴とあ
らすして塀の内を見まへしわけに桐の木は何鶉の勢
あると之余ハ見えなりえ

はりに山や稲浦うけて夕すゞみ

此やの字切字もかりに至て用なき事に此か歎も阿川に山と稲
浦とは間を隔る隔て一見の所に付て限故に阿川に山とは歎を

の席にて始て捕へて涼しきかりし夕道にきこへしと之切字の
御を云ふへし各翁の仰也之

第十七　脇ノ韻字の事

脇ハ山川なりと韻字にて留るといふハ先ハ初心への教への定之の字に付
入られたる也之

いろしの名もむりしやたる此字
られしく條な花にきぬる

此句初てなんらぬの之味を露る人く俳諧の名目の難しとてきとい
ふる字を生に一篠を侍して條の處を定めしぬる不一句お對して
脇の作なれは句字を不兼れ作義なし是角に脇ハ発句の
余情気象の面に成やうにすへし脇の所揃おさむるハ脇のんに
あら次（口傳ニ能ノコトアリ）本句ハ客の位にして脇ハ亭主の位なれハ也り
人をまねても本句みえおかしきる其本山川の一字二字の風情
を都ておの余情をこしすへき也此脇と條の一字にて事なり候
を入候へし

師傳に三つ物の事ハ脇こさハ第三行を韻字に留るハ其の脇
と云ふ行の脇とハ留りの文字なかくなるくあるを云候云ハ

人の糕もを饒　歴　默　　荷兮
下樋の上に蒲萄かさなる　　越人
東乃志れむし葉りはて山のまかりや　　去来
・誰て先汲ての女ぬ翁　　支考

草の扱とりし雲も

冬の鶴日此何となれまかり　ちさ城

ゝ隠さしに芦ちりさるゝ　ゝ

雪積の挽何やめ折を得　ゝ

やゝわ植尾のそちるゝ世　ゝ

礼をし侍り作意の志りろさ　去来

侍らゝ山案花を宿しにして　由之

ゝらし好て常に競じおるや　小枝

此ゝを章の眼と云本句ての住まうしかりも理屈めき称え
あとる例ハ本句よ付し其扱ハ此の位も地の用ゝ動かぬを以て
ましと寸故に韻字を居て其の扱を守行章の扱ハおのの弁まて
るゝとし翁小枝よりのまゝ手本来の扱ハ夜我の例
誹諧ハ我なり上へハ其をかゝさてと教へ給ひし故に北枝扱の句
を直させ給ふ

とのまゝ翁を竟きが得別　ちさ城

らし好て鳥り競いさえや　小枝

初の例ハ本句扱其後のめし翁ゝ本句本てゆいて

との書て翁別さく名残か　ちさ城

かし好て常にさるあけ迫の　小枝

此ハ改る例外ハ韻字を得へきよ　いろしの名をむ向
しやとハ千歳の迷ひの銘ハきを為て見れハ師に一持を以て
手本を写へしと之本句ハ称頌　後改 洒堂　扱ハ翁之　扱一句に

初春を付らハ其まゝ發句に心を添へけるハ大なる御事なし
口傳之能の事と付るも脇ハ脇師の位を知り發句の主の
位を心得其脇は其勤に其主の位しらひなるへし

第八　第三手尓於乘之事

第三の留りに文字の定りけるとハ一句の主發句の主を添れ其
下の留らぬ不用し次の句一反はすへき為之歟隠を去る時ハ下の字て
の字らも作らせ付と知るへし　されハ此句ハ第三の主を知る之と百句の中にも
擬じおすへきかと第三の主を去らさまして甚たり定りける留り統る
へし其韻字留之傳え是とし書ハ初後予欺と留押字抱字乃
治めるハまて知らぬ人の推量之
かくろ来きまし定まらぬ帰　而

いつも連の時ハ我も此第三ハ第一に一座を定め一向に代を與るさへ發句
と平句の其との境地第三也と知るへし　されと尋常の留りをもかく
候し　事之

三ツ物傳云第三ハて其人の人の句まて通しの御のなされ
古の第三とは

霞時のよさすさびしき牧の暁より
猿曳流身をなのらる山越えて
初日やまり雨空をもかくらん
秋暮し絵ぬる月さぬ事なり
山雀の笑し除へき筆なれし

かやうにてにをの御なきを古の第三と云之行の第三ハ脇の留し

字為りおかしく響の多きをいふ

花蒜て背の出し咲梅哉　杜国

桜　桜　山茶の伴を木の紫陽　雪五

第の中三ハ御ゐき字為をと云

かゝろきもまし定まらぬ帰所　たを哉

行旅を遊りさしもる。乙丸色　千川

又中三ハ耕し協る次へ掛りあきなくまかを去ふて為ると

いふ説もあると三ッ指伝の説に任へし前にいふ中三の乙て為者

の哉に娘て小で云人々唐崎の句より出る歸ゐるへしかるに今世ハ致

ふてあうさ子細なき侮し

第九　四句目ハ軽き支

四句目ハ波又腹前生後の句あまくてをさり大事の協と軽きといふ外

句越中三とに骨を折り放之人ハ只其句出る所に云かけまとを走

此変化とさきに句よりもちし協る也仮ハ万物一合とは反しかるに却て其句より

四句とそ例のさてさ其ハ軽く其ハ違く其ハ安くとて句を附の変化を失ふ

ことし世様ハ中不び上の為にして中以上下の人ハ过て此様をいふを哉

たゝ言きまとへ共句の仮託くしまふ人といふに應し

詩に合の協を结句といひ支ることある支を走る協に走る様の

百句あする句を走る生る協之世よて前様といふて之かりと為孫をあとより

ぬする人に仍るる人そ体るへかりかるゝとさくるをよりきく之翁の花色

百余発ミ世にかりと為るて句目ハ格れおよう為きる之天の報恩

三とふて百物を生し此の数ハ此とし以て和合するへて句目ハ百員の

あるは花も一きハ破れ安く捷きをやよしと成　古風の説は
に写る月を弁庄と云事あるハ甚しことを私に三弁と説る
様に定句めをて弁と云ことあるて私の字を好に事なる家門なる
論なし　為弁抄に中不を上とハ武家の人とを云
き家隠逸の人を云成ーと又純ハ中不以下ハ千次の人を云まされ
者也後の中不以上と云ハ表に太切の文をひかれて作人の中不以歳
一ー初者なくてハ世捷ハやすく雅し　中不以下の初心者を学なり
是初者の人を使く其座のさだきハ知べしーとぞ

第十　月花之支

月花ハ風雅の的之月ハ月に花ハ四季にあって四花ハ月ハ八月を定
出る之け是も名残の裏の月を異に去る捨まく其他の時ハ二花二月
もすーし表の五句目に月さて裏の八句めに花をさせとおの
秋季を定むほうしく殊の杜をのも仕かつーし　秋季の外句の時ハ
表も裏も月あまて若しかるまじき事也　此は愚意也
人も知るーしまた一座の何らひの後　初心の人いて月ハ七句め出ハ
十三句目あたりにて千も作人に譲る時ハ必之いつくまでも子細なし
おゐて月花ハ風雅の尾をなさしおくてハけいぬ其随と知べきの事
月並の句に新しきを求め作り候一花の尾と新しきに依て
毎く作の句なり当其時の手に依て差別し候して　当世成
好む所なり候
古風の掟に御の月を言及の花也とハ表ほそく杜歟に出し合
さあるし雑の句とおすをと蕉門月ハ季を嫌りて八さえ

用捨さるゝと花ゑハ雑の花扱なし　そのとしハてといふなきゝ花ハ
弟物称美の花なれといふやうな仍りたる句なり其正花とせる
つき之　これハ月のてなと古今抄におゝ句なりして月のハ
を称ハれなとも古翁の塔しハまはいまゝ　春の日ハ二巻あ
月のましみて入之捨るも
朔日を言ふを以脱治の昏か見しく
し月おもえて此門にやしぬ寺
これらを捨て又以て又同集に
東風にも倒れぬおとの海お硯
売おしゝる出なる川　夕
此これハ月なと実詠する句月の其字と月の字遊い

てきあるにおとしふ人をもいふぬさしとんねゝるあや　いさお徳集
これハなるゝなし仍此扱さアゝきて斗とを葉きお男子
或ハ花のなき巻　冬の日空巻月ゝ夕名お花
泥にしけるの清き芹の根
粥すゝる暁それかしこぬり
行きみ貢外初巻初裏の花ハ操みてよらてるめ
々やまことめて此の一句　冬
花さかり都りいまゝ定まりは
又しるし短句に花を仍る句是も物しゝみその日
五巻わ見おのらう
又詠にて字此　扱も他のれぬべし

伏見木幡の鐘花をうつ

春の日御巻　初表

名あるより来ル集の抄引て

花は七野の窓に何る比

月花の文句夕し　廿一二　深川夜の句

是のいぬくさ秋涼なるかり

是も比良の三ツ松小わり

新集二巻の初裏

旅宿雑なる人の姫達く

花ハ赤い　夕ハ秋夜

市のゑの声

是にて三ヶ所標本の夜

月は小さき門をい入門

月花春の艶色といひ秋の情も冬の虚さへ花ハ光て

名月にして物の情の相対とかく也

第十二　花に桜似ぬ事

世に花といふハ桜のことゝ云人もあると花とは芽出れ人の花之

然ハ花笄花の数々の花波枝の花其の余あまたの

くの花也花と賞数の二字定りぬハつまみ花なし

春の花にして植物の三季へし花ハ春の発生也

物なれと古より筆の桜をしも侍るみ花を初心なる

事なるんまた桜綱の類なと花の外なる桜のけ成

らくに云ひて付へきせむおの秘なの道也此数あまし知へし

花ハ桜なりとて桜にあらさるにてハ非さるといふ事ふ来の傳

文と知へし一口傳あり　系桜の事を

花ハ芳野山に指て麻?の詞なれハ桜なあらはれ又一京の

ていか時ハ桜之故りさくらなるならハあらさて

口傳さハ桜のことくいふも桜なうりにて花の花ありえへし

芳野の花なとのていふと其桜一本をしけめるなハ咲とハ

きしくもか詞を添る也梅の山吹のとらハ数なハあらハ作

花ハ桜ナリ何もさていふなかにこそ集り

発句
木の下ハ汁も鱠も桜かな　翁

初折花
手まも花のさかりの一作

発句
江戸さくら心通ハんいくた川

初折花
其外名の字にかつて花ならぬ一文字添て

其外名の巻あり此目の名を書記の名をあらはし折り

花と桜を

又桜の何と何とかいふことにも寒　猿蓑之桜の花

系也くて後一年ハ花に咲なり

或ハ何か初折の花さくてあし

此さくら一季桜も咲のこり

或ハ梅の字初折さくらさくえ咲て実をあらはれ

中三かハ一れかれ桜の名掃き

これらハ桜を何かするにあらは

又花と桜と付るて古式花と桜の分別くあるなれは
いはれても古式桃咲る白の時分
桜咲木の下蔭より便みして
天文二年花咲ぬなり
これは古式ありけり桜の例なり　北野桜子桜名のれ
又付る之
花は桜付る例
唐崎の春さきもりに縁りて
山さはやまを志深るたる丈
法の花年盗人といはれける
桜咲けり　二十八日

桜は花に付るは例
いつても花し一　桜に花惜
山はこれ嵐折りまつる花さかり
名所の花付る例　白の巻挙句
結ともの綱をいらさる義の順
奈良は世りあり八重桜の風
花によし野付る例
痩咲を早下して見する花一本
去年も今年も一本の若
芳野に花降る例
くもりのみ雲と成か花なりけり

春しらきこれは何の世も花さかり

第十二　季を乗せる事

月花の句は付句にて四季の内句に季を乗することあり二
三句の除き時は両季を持ちて数句より乗せ候、猶獅子
義と数句を定め内の花とはあしらひ雑乃と数句を定て橋
の月とあしらへ其の二三句すぎ時は是も両季より乗し
或花月等の数句も一句の風情を見てしされど二ツの乗し
季はせんとより変化の為なることと心得べし

前の二三句程く数句より秋句さ様之此集に

布子着る婦　凧の夕

押へて講ては名のり　仮名なく

色に霞の空は花まじきさ

此花の座に数を造ると数句を定て其の花は両季の内
あしらひ之

一かは此之数は定むる定此也

又両季より乗せる句

さの間に諸を見かく寸橋の上

太きな諸の見に中抱る

さのりある花より底をおし落て

これは花と両季を定て花は付しらひ之余は押て知べし

第十三　二季に掛る物の事

右之二季に掛る物と云は其の候と云秋の物と云に

三句の悟きは雑季を持…
趣と趣向を定めて花をあしらひ 雑刀と趣向を定めて揃
の月とあしらへば、その三句目きき時は花を当季より案し
又花を月雪の趣をも一句の風情と見てしかれは二つの案し
方はともより変化の為なることゝ知るべし
前の二三句悟く趣向より其句さはさ此集に
布子着て寝る 婦 風の夕暮
押入て寝ては冬のぬり 伝なくて

風の庵の名残ましき
此花の座を秋を造ると趣向を定て当季の花ハ当季の所
しらひ之
又当季より案する句
一かは流之秋流る窓流され
其の間の詩を見かんかす橋の上
太き寺詩の光を吹き柱る
さのりある花を流をおし なる
これらハ花と当季を定て流ハ流しらひ之余ハ押て知へし
第十三 二季に係る物の事
右之二季を係る物とて恒の候の宿と云秋のきは…

句の株ニ付る時ハ何の字ニなきハ秋季之此類ハ外ニもくさ
こと哉ハ節句の二字ニ名月を付る時ハ大かたハ植物のさしみ合
足又お句ニ付ても西瓜ハ秋季也し牡丹ハ夏ニする類之夏
季ハ瓜の類雅くして故之冬の夜ハ秋季之月ニ付ても
本句ニ仕舞る時ハ七句め代の季ニし冥名のるるを駒鞦ら
秋の小春り又これを必ス冬季統へしとに十月の比おもし
春雨ハ霜之お茶ふかハ遊へし沫雪ハ春も統へし ハ式法アリ 口伝ニ新古 在
結の類ハ夜をのんあらして八両なかしすされと拘ト云指ぬ候
手毬ハ此類ニし初へし此ちんさハ古式ニハ分ヲし 詩の哥
結女とハきぬ事之うてのれと云ヲ何とハ云へし 口伝子ヽ コトアリ
されたよくきりてするハ吉の拘しハさた候へし

帰傘の古式ニハ妹の作者妹の出替せよ何の字をそへて
統ニ用る貞享新式此論あし本句ハ前季ニ用ル
其外ハお句ニまかるをとより結の三季指の三季節句
の類冬季ニもくふ案ハ是に准すへし
星ハ夜ハ雑季也るをとこたとかく いろいろ翁の定字
月秋の外ニもる之統ホ花と賞翫の詞なりと云てヽ
星ニ秋も冬の字指かくし故ニ星ハ夜なくし月を
持とするもあ
名所表ニされく帰ニ青戸のなる
杉ノ日のさにおとの星月夜
又星ハ夜をいさく月のるの巻

名残表　引かへり迷子よはふる聲きく夜
、旅の寝覚してぬるかし月秋
是ハ前句星ゟ夜同表の夢みぬとみえ
年ちかや家中の礼めて聞る夜　其角
うち竹あき緒のききさみその
口傳云 子夕の事とハ金音衣打と云 衣を放つは詩の心とハ
云也 砧打とハ溜やどをき 砧礎と云 是を新盤なる打の字と
いはぬといへば家や能よき句ハ詞ゆゑなりて 砧打と多くを
されども又詞よりさく 入月と驛の名のとをじ鈴の名と
作ける也 又和名に衣板と書て打とのく衣板のイの
略なしき又多打とていふなり 先 砧打とかく句爲の事と始

故郷のうちより 砧うちかねし
きぬぬくころは花くもりの家
碪ハ体来さえしらぬ墨ゆゑや
手習の云を砧うちしをあり
又碪の音ハ姿情を論せす聲ハ遠くしく音ハさえてしらすり
虫の旅夢の心笛此旅風此松と碪のおと斧の松の類
旅とれとハ姿情の遠て尤も古郭に多く碪の
音ともなり
夫木　後九條内大臣
露霜をおくり迎ふる碪の音にそのしとみくすむらん
逍遥院殿

山寺のいりあひの鐘のきこゆるかとおとろかぬまつるをちぬおもほし

山家集

暁のはしたたいは鐘のきこいんはてこにこえてきく

第十四　発句の時季に用る事

季は夜並備考足比庵中の数扇捨あと翁本二用るその

多く一ホ句よする時ハ当季平句よりてハ捨め合居分けは

されも句の格ゆえ慥に冬の気しかに夏と見ゆる時は其語気く

及まし此推と分隆の事し文とも文字の格め字張はまて

見かしきて

此段も古式新式の差別あり

裀ゆ古くて綴るしいきの為変かれ　其角

此句この抱狂の時節春之とく春季にとゝり此仮名と仮託

の室に益く一句に侍川の如作あしき

花を旅ノ代かく小田の行商り

此作ら元禄六年名月の句に尾張之旧交に対してとき

古式新式ともに耕田鋤の数ハ春季なかくしは句を時節し

夏季入之

翁法ゝるく翁月翔いつ式義取の

旧年帰りて人しに対する一季

却まく神も旅旅の句体哉

この句表五字は冬季と定る不はあり又宗翁の旅行

不抄途の秋冬をと

第十五　発句俳諧の変

発句は蕉風の始とさだまりしより句を作て目を定画に准して
みる事也 死活おのづから句の上にあらはるゝ其世故に俳諧に姿を第一
して其情を備ふるなる事也 其で発句迄附句とても目を定て眼
おとなさず ほかにしもかりそめの人は見ぬところの指南也
目を定て附るとて季を定て附るとなる門人代々の皆我等の上に
みる 猿簑集の頃に発句には季の定りあるとぞ 口伝ニ連歌ノコトアリ
画とて山に芝といひても発句に姿をさだめてうちにうつすべき也
事迄に姿の句には自在なると
風雲とおもひのはて 西の年
其角撰やかるみ十体は其のさし　　貞徳

扨其は姿つくしと情はかりの句と情其は姿を先として情
はなの句也　こゝに先づ俳諧の風姿風情を俳々立る
の其品あれは古風は耳にも情を先にして言語の上の姿を
その也 今様は目に先姿を先とし言語の外の情を含む
是新古の差別古の俳諧は言語の余興よりいと起る
連歌にかはりぬ詞のおかしきをもて俳諧体
とす也 是より姿情は俳諧と出来れりきを姿と
のうけものし情は其境に極て俳諧にうけて人よりその
此気も分るなれば姿と先づ情をことわりに気ぬさぬと
しに離んては一概には論されて是也

姿
姿
情

古池や（実）蛙飛こむ（実）水の音（虚）

何すゝ（姿）河や伴ふ（姿）横ふての川（実）（姿）

竹の本の（情）鋭きて（情）限句に（情）かの風

比挑の（姿）むゝし（情）横ゝ桜の（情）本花

第十六 附句薬しやうの事

発句は格式の事之附句は一座に至て無性に素しぬよふき之我心派にぬまて趣向派に春学成り入は学成て一座終ては茶能きる附句は初心の趣向なりも趣を落し付るゝ能之此故に趣向を定るとし候まゝに抛しる工夫は年まくゐる事くて座に至ては正無くかなるへし定まる事は除く薬しては その之と作薬しは附句や一調子のかのくさ何れもとく速くおもしろくはなきもまなりくもし薬し又たれもよくしくは一座のかしと私てこれなんふる此は情に依ある修行あるとこれ風りれ但まうのもうは之こ故しても之ひ近ひんのむきおき解てくるもの也 口傳ニ無法ノコトアリ

一 たいろねハ早がく調子のもの之世性く潘ぬるよき之三郎
かみ廻りて当句の趣向を定むる之義より為良一句文に
取之をハ伊勢へ付ル事し 此之義く俳諧為之事也
其外にハ之人してのハ付てきし也
其先俳諧所わし世有る句の病事く
手柄なる事をして事しなし 一句之にてなけるなん
談合獲の定立変る如く 伊勢の旅寝
ましにも有調とんこ残あるきして猶又一句之
のはあり置てと作せ 下略
これよりハ三郎にも[illegible]ことゝいふ事之例 之さ集に
中しり土肯にみえれて見ぬし

来名ハ里のなぬるさかる之
一 文 其名ハ海寺旅語の浦浮名此趣向
中さ肯かの ころき心ぬし
おハ云伊勢の旅寝ハ旅語の浦浮名の俳人之然ハあふ
八三郎よみ給し 口伝之云法の事といふは三郎の旅寝古
の事をとこ之月比より柱業を相違する世ての霧の時ハ
古三句の俳ハ海 然ハ大将古将あとの三郎の
名まてハおよかのなし 七俳ハ俳十七俳といふ其を之
云て俳の付合秋の付合よりかるなといふれ
事の俳句としも座ハ無性にて人之対まて居す居て
次とこれを吟す

百ゝの抄
尓ても生陽ひ〻必嗜し（口伝ニ源氏物語ノコトアリ）され〻表ハ句の趣向
柳　桜　塗笠　暖簾
むし　謡　手習子
月　新酒
如斯趣向を定て並ぶ化しも不化も或ハ初ゞに或ハかく
足ハ其表ハ句作の手妻之此法をえてされし人のたハ頼みに謂
くもつり最二字三字の趣向より変化の安く作りに高
右之通りに此法をえてさまで秀句を作て後ニ手越なハかへらき
変化ハ面白みハ大下もしの背抑とふ心ゆかり其句をハ体せ変かる
し二字三字の趣向を形るとハ為て情き手を抑さも
作りし此法ハ我上に変化の為と人得へし古の傳書紀
氏伊勢中迄て手ゆるむ所とあるとい不ことなし了代豈人の為
尓生を作りや手中ハ其初めあることをを知べし（口伝ニ天地人ノ名附タルコト）
又二字三字の趣向あり七名ハ件まぐ或世を空撓
とりまきしにて千時も句ゆまで文字の名
まさしかくし是を口伝に法の手と
の切作り之此方撓て居貞不案ハ之
ゆかよされハその道卯時の妙

第十七趣向を定むる支

附合ハ趣向を定むへし手前趣向とハ二字三字にてとり
ら次是を掛中の法といふ之篇ハ其中をえてお後を見る時ハ
百千の数をくに前なハ千し人ハ初より案して終を見るは
尓も中陽ハ必噌し 口伝ニ源氏物語ノコトアリ されハ表ハ句の趣向

ヒも　大川　櫻　塗笠　嗳麗

いつも　鞠　湾　手習子

月　新酒

然れハ趣向を定て異を作りしに作る式ハ初めにかく
思ふ者共ハ句作の上手之其法をえてされし人のなすハ聞ゆ
くなり最二字三字の趣向なり変化の類ハ物がらにて写

ある故に此法をえて[illegible]前句を作て後に手趣ははかる
変体ハ面をうけ今やしの背別より始る其句を人は付支かき
し二字三字の趣向を初るとハ寄て作るも其をさめ背初りも
那し此法ハ中よ変化の為と人得へし 古の傳書仏経作
氏伊勢源氏てよりハそ始らもとハいふなし了代賢人の為
尓ゆを作るやうの中ハ其初めあることを知へし 口伝ニ天地人ノ名附タルコト
又二字三字の趣向をも信ハ七名ハ作り[illegible]以世々寛撓
とする案[illegible]て時ハ句よ作りをまて文字の居所ハ
其て[illegible]し是も口伝よき法の事と[illegible]
の切作りゑと此定て換て見るも定不定ハ之を[illegible]
がやされハそ作の至り[illegible]近代の好ミ[illegible]

きて始終は

又て代ハ人の名つけるとき日月星辰これなる人の
持る名と治情のお後にかくのことし是又一日の作門
云也

梅かあしのかと日のきいふ　山詠故
にこし詠りしより雑子の噂しけり
我着請まての遠に見し附る
梅かもよしまかる日の句ハ気持を見て　世上詠にこすか

の伝より持りるし事を車比の切より句の場を遠さ
さて場ところのを定て何とありと人より名て作す持
之同しく中三雑子の噂比ハやり日さ永しとありけるより
遠者もありしと着請と赴句さちて其の字ハありはいに之

第十八　意代句之事

意の句の事ハ古式を用いすも抜ハ始終なると其意附体の文字
名目として意とハ大体只前句の心に意ありて文字を抱て意を付
一　此様に代門と持ると云る由意ハ風雅の花実
なまて二句の句の有るとしてはえハ陰陽の有郎を定める
る之見ハ事々の定めりして代門に向て其さて意に付て代
詞の意をもて意に付する句

此梅中の二字を以お後さ言まとる時は一巻のたこハ自ら
宜なり
口傳ニ源氏物語の事をいふて梅中のると此ハ放テの巻ニ
きて嫉妬ハ用ひていふ古来多くかくのやし
又て代ハ人のお名つけるとさは日月星辰これはる人の
指る名と浮情のお後とかくのことし是を天へ日の例あり
云々
梅かゝにのつと日の出る山路哉
ことし詠しけり雑子の噂より
本意請ナとの道に見え附テ
梅かゝにのつとある日の句ハの梅を見て此山路ハ心の中撥

の伝より持れるて其を事比の功より者の情義人遊さ
まて情るものを意て何とかりと人より名も作り出まる物
の同しく是三雑子の噂比ハやはり永しとありけるより
遍背も何りし意請と我向をちて其の字ハ何つらひ之

第十八 意抱句之事

意の句の事ハ古式を用いすして故ハ嫉妬ると云はある体の文字
名目とし意とハ大候只あるのへて意句とて文字も拘らて意を付
あまて二句より五句まてあると云てそ指るとある由意ハ風雅の花実
「此嫉妬代門か人意句とし云て是ハ陰陽の反理を意あ
る之是ハ家々の意ひして代門ハ向て大体は共くかうして凡
詞の意ある事て意あり言ある句

生れ馬のそれはも浪のぬしさまかな
老のちかしにむきて見かしら哉
此中へ牛の跡あきさふ
燃みのきかうかきかう門辺り
秋の形所はくまて愛にけり
上﨟くちに旅枕さらなか
京の詞おくて京の門を句
遥人まとぬ中を目旅のとられ合
師走の日ね折ち梢あらし
花ありあるへき三月のきぬかし
月影に隠とあるを見遣し哉

他門は京の辞二句三句と続きて京づれなりとも表はそのうら
ハ誹り当門ハ除てあるの心を探りて京の詞までハ京なり
其まで京に付ても其人時宜まてなるて何句ハりまき
旅まくらて女なりしの情なる
此句ハ只京を付てハあるの女を身前にとる此付句く
所情かけを隠す故みかの
かやうに詞のあしらいなりおるの付し情を入とも実ハ
京なるく
こゑ一京
鳥羽まの姫きり女房来く
京を見入るみ海の日

妬む意

いとおしき人の身を迄川裂て

壁衣の面影作り泣く

謗り憎き意

謗奴と似をそたきき笑ん梅もどき

あら野の百合に潤ふみはる

第十九 切字に口伝ある事

切字の事誹諧抄にあまたあれど廿八の世にはことに相増りし大

廻ト去来切などといへる切字のことは家々に第一説有古

の比の俳諧まてはいうに云はれぬ古説あるべし

に於三段切二字切なども其家の説句は人得難きなり

二字切

山ざしきかの底や水の音

三字切

子共よし名残の月にぬれぬ瓜むきん

三段切

梅若菜まりこの宿のとろゝ汁

是ハ素堂が隠家の吟なり

目には青葉山ほとゝきす初鰹

いふ句は目耳口と三段をとり持同じ事の句にて人の三段を

知べし其外二字切三字切は前の句中にてやといひ又はかなと

根から人をきりて四へ三字切は不残等なり

夢に見えたや顔がぬと言ふ様に
こいふ句はとの字で押へされを切字に用ひて世れは餘多ある
詠み様に押字抱字の詮議多し切字なくても切ぬる事も有
むら
夕ぐれや妹は浴しのぬるくか
といふ句は上の夕暮や妹はと句読切て其の字にて抱へされを切
字とあるはこの類多く有るべし
猶の哀やもとき閨の鐘　有
是を中の切とりふ之遠の鐘を称えて中に分ちおしよする句
法之まかりける人を知我の山おゆしとよみける歌の類之
歌は歌をくく業をく集をされ

古の若者ハ案ハ異に准すへし

天　一ツ　ヒメ（ト通音）ハ日立ノホル

地　二ツ　ヘタツ（フ通音）

人　三ツ　ミツル

切字ハ千代の昔より有れとも切字を入ることは跡を

一句の座よりて此之

第二十　指合之事

俳諧よさし合の事ハ先れとも学此数をはふへし然し発句

の事よりさ一座の句篇を初心ニハ譲ても句の

好悪を論して指合ハ作の詮義あるへしさし合ハ変化の

深くしてこそ故を知へし変化の恋すなる甘すなり

捻ての指の法此捻よし志ろへし

一座の点義によりてさし合は譲らるへきこと古式より見事

式は知らきこる上るか式の通りは句論に上を先はあらく

先ハ捻くして千句の変化よらるへし翁の書して花に

桜の三句去りてよしにかしの折めをましろく

千人よほくへきこと

第廿一　辛崎の松は句也支

辛崎の書らをれる誹りを

此翁句の意を知れと第三と平句との差分を知るこ

発句ハ一句の内と曲節此句と花ハ曲にて松の於と

ハ節と曲節の三句ハ等の浮上るりて知へきこと

辛崎の松ハ花より夜朧にて
是ハ千三の古句也此句手尓葉言さ花ハ松花朧と云言葉之
辛崎の松を実花夜又詞て
春のなかめとして曲もなく節もなきこの之此まる也世
情ある翁ぞ昔の清あれ共まハ初心の人は論之ますハ朧
ださずやと朧めしといふ詞に哉ハ此文字の辞なれ花より
雲に面ひとしき文字するの斤題の朧花のうまかりしと云にも
嬉小事之

さしはやき也の入けり朧もめで
句もの振れ花哉入るらぬ
之詠る其花より辛崎の松の朧めし但と西かゝ仁ふ此文字

の中此文字之事をかき上の事
三日月ハ二夕ちかりまでもみるう
此みて人ハみし紀るへし用く三ケ月ゆかり西日計
八陣の三る月るてけらんと此文字の人をおしるる之最もて当
の事ハ事も古翁の発句やさしき当の子細は有る文字をせる
へし　口傳ニ其角カ雑談集ノコトアリ
門人問云外の一味を千代の人もいまに又熱しき方
ある事人ハ菜ハ友まきさらくわつらに侍るみ
やとやまたま中て又わかくし中古の頑作とみなりて
其流の機にかゝ乎を失ひ申上又寺句法に例社の
骨髄をぬかしめ悦ふる中手の事ハそれに寺え人の指的に

はて辛崎の松を来紙夜又悟

春のしかあらて曲もなく節もなきとのこ此ある句を世

清く発句の沙汰あれども又は初心の人は論之まは鉄

がきさまと鉄めしといふ詞も哉は文字の辞なれ花より

まさり西にひとつ文字するの所聞の摩院のうまかくもし芸にても

嫁に事之

さしはやき世の人にり頭をめ

之との之る振花哉又るられ

と詠る其花より朧にての松の鉄めし但と西かんとふ文字

の中は文字之事ならびに発句の事

三日月は二夕たゞかりまてとみゆる

卅日てらんはみし紛るへし月なく之と月かくる十五日計

は誰の之る月にてはらんと文字の人をみおしるし最も発

の事は事には発句の発句やしこ発句の子細はる文字を発る

へ一

口傳ニ其角カ雑談集ノコトアリ

門人問云外の之味とよにての人もいまう又新しまな

ある一千衆は友まきらしくやうつわしはるみ

やとやたまもみかて能うらも中古の頓阿によみげりて

是非の境ニ於て先め卜又其句作ニ例詐の

骨髄を得が能性ある物子為し才人の指的に

いかなる姿をも発句と思ふしやみやしことは實ありけり白雪
に哉留の事にて留は非之を嫌ふによつて其てにをは
を撰びしとやかなる発句せしかしこ下されしとそ
新古集にくはしし

第廿二　季に脇の句入る事

昔蕉翁深川にて脇に季の句附くる事をこゝろ付されし人稀
なるをみて定まりし他人の格式なる者し

蓮の掬り　季を詠込みける

季のみ名残の波見して衣めでたしとは

これは前句の花を詠のおもと見てよりかくてよめりけりと
附けるに此哉は前句の心を発して出れるなりといへるしかる格

物比臭といふその世まおる句を事出るを秘格其のおかしみ云共
上留りなとの拍子をはれしけれは風情く
差道に枇の小節拔換ものとは
丁花山比月を定席る事
是ハ古代の舞ひさしと定めたる身をえる其と詠まれみ
しほ之哉ゝ寺句の哉留ゝかはりに此ハ皆しく子細ある
まゝし挿柄を好ゝお足を求くハ心をはしきなり

茉薗集巻七春俳諧

森のおこのきり手みなると詠侍りき

夢のみる花の姿のなれは本を引春りのあるかやかる
此附句よりゆて六尺ほど之坪の本國より紫荷を探見のみまて又翁

なりり読の道なきに
文字附の侍におゐて読むなり
第廿三　宵闇之変
有明の前後の裏か七句目ふて宵闇の句ましく三句の中より
月を嫌ふ也
宵闇ハ何にても嫌ふ所の文ハ無し
北なり萩の風戦ぎ出り
八月と読むとしるき小梅縁
最宵闇ニは月ハ除かれて可也折も同比ハ嫌ふし十月ハ
ともかくの心にて無季なれ共三句の分をてと嫌ふ也八月の句にて
の字とし又例の月の字をはらはるる是を一季のきハきと云

宵闇の月とハ云ぬなりしかし三句を今をこそ月の字の儀を知る
事し
宵闇とやかりハ月のなき夜ぬと続てに無月の字道月ふ
して撰集されたるにハへつて次是ハ文字うつしといふて杜季
にする事伊勢物語は心に月中句之さて清きハ中
西之の気あるハ何と句ふなり　雅萩の字ハ非風の何ゆへ
といふハ月となりするをのへされたるもしめて行はれさる
奇法也月の字なきをいふとしハ月とろ次の月を出
されたる是を新法といふ
第廿四　名所并雑の句之変
名所の発句ハ都て雑の句を詠る事し名を云季をとりて附る也

出穂ゟ去嫌なし

鈍くさを誹ま川此所ん
このち為ろた杖突坂を落馬ゟ事
慥ま事ありくしまに次ナ此不
や

此次ナ此石の句ハ平家翁の西国を指て境遣揚ゟなとて云
るとを思ふより立じやおられたれ出しを慥ま事の南季にかくれ
らさて是しきど類の俳と元せ云て季不の句格とる也

口傳ニ無季ノ格ト云フアリ

年々や猿をきせたる猿の面

といふ歳旦の例を

類の句季不みかきするなりと覚えるなり左にかりきて補残

おゝ手の御文又ハなとゝしるし 此類ハ心得あるへきこと
なり
い イキク 鯛（タイ） 鯉（コイ）ノ類
ひ フヒヘ 葵（アフヒ） 雛（ヒナ）ノ類
またひハあそひてあそひ 此類ハあまたの所也之
を をんな 山をろし
小 桶 找の字 をと同し
れ 桓ともし おろし桶 おの字ハあるへしは
結 を 小を
太 わ 尾お おの字ハあるへるし
も は 同上下ニ用

ゑ 上ニ用 三輪の時ハ下ニ用
恵 声楷の数 又ニ出る 此時ハ末の字それく之
え 中のえ 消きゆる 机 杖 へ
こへ このふる 是ハいよへニも通 栄えく
； 是ハ古実之あくどみ 数く
縁 む えむ 此数く衣文の下に
口傳 フ へ
ゐ ふし節数く 盥 タラヰ 墨ノ時テアライ共
お クレナイ 又井共 住居 雲ノ夕スマイ 山ノ夕スマイ
法師 ホウシ ホツシ 入声ノ ホウシトハ古実ニ ホフし
雜 サウ サツ 拾 シフ シウ 此数すくて入声

ち

それゐとちろの数つまみてふちの字也

仮名遣の事委くハ是であまくろしおけるか実又注を加へき

偽訓二十五ヶ条辨書卒

文政庚辰暮春

芝陽庵州

聖和學園 短大 第6438號 受本 昭36.3.14

文政庚寅[illegible]　[illegible]